

「青少年の体験活動等と自立に関する実態調査」 平成 22 年度調査報告書〔概要〕

平成 23 年 11 月 7 日

国立青少年教育振興機構では、平成 18 年度から青少年の自然体験、生活体験・習慣の実態や自立に関する意識等について全国規模の調査を行っている。平成 22 年度は、学年間の比較および平成 18～22 年度の経年変化を分析し、あわせて保護者の子どもの頃の体験活動とそれを通して得られる資質・能力やその子どもの体験活動との関係、さらに居住地と自然体験の関係について調査・分析を行った。

<主な調査結果>

《青少年の体験活動や自立に関する意識の実態》

結果① 体験を多く行っている青少年ほど、他者への思いやりや積極性などの自立的行動習慣が身についており、自己肯定感も高い傾向にある。

■ 生活体験を最も多く行っている群における「困っている人がいたときに手助けする」の「とても当てはまる」の比率（52.1%）は、最も行っていない群における比率（7.6%）の 7 倍近くである（図 194）。

■ 自然体験を最も行っている群における「勉強は得意な方だ」の「とても思う」の比率（17.9%）は、最も行っていない群における比率（3.3%）の 5 倍以上である（図 220）。

結果② 青少年の自然体験活動の実施率は、学年が上がるにつれて減少しており、またほとんどの活動に関して、ここ 5 年間で減少傾向にある。

■ 「昆虫や水辺の生物を捕まえること」について、平成 22 年度に学校の授業や行事以外で「何度もした」の比率は小学校 1 年が 30.7%であるのに対し、高校 2 年は 4.3%と 20 ポイント以上低くなっている（図 6）。

■ 小学校 2 年および小学校 5 年の学校の授業や行事以外での「山登りやハイキング、オリエンテーリングやウォークラリー」は、平成 18 年度よりも平成 22 年度の比率のほうが 10 ポイント以上低くなっている（図 105）。

《保護者の子どもの頃の体験活動と現在の資質・能力の関係》

結果③ 地域活動やボランティア活動などの子どもの頃の体験が多い保護者ほど、人間関係能力、文化的作法・教養等の資質・能力が高い。

■ 「地域活動」、「家族行事」等の子どもの頃の体験が多い保護者ほど、「人間関係能力」、「文化的作法・教養」等の体験を通して得られる資質・能力が高い傾向にある（図 375、376）。

■ 子どもの頃の「ボランティア活動をしたこと」が多い保護者ほど、「人間関係能力」等の体験を通して得られる資質・能力が高い傾向にある（図 377）。また、「地域活動」等子どもの頃の体験が多い保護者ほど、「ボランティア活動をしようと思う」という現在の意識が高い傾向にある（図 378）。

裏面へつづく



《保護者の体験活動とその子どもの体験活動の関係》

結果④ 子どもの頃に多くの体験を行ってきた保護者ほど、その子どもも体験を多く行う傾向にあり、また自己肯定感の高い保護者ほど、その子どもも自己肯定感が高い傾向にある。

■ 保護者の中学生期までの「海や川で泳いだこと」の体験高群における子どもの同体験「何度もある」の比率（63.0%）は、低群における比率（39.2%）より20ポイント以上高い（図224）。

■ 「自分のことが好きである」と思っている保護者ほど、その子どもが「今の自分が好きだ」に対し「とても思う」と回答する比率が高い（図387）。

結果⑤ 保護者の自尊感情、人間関係能力等の資質・能力が高いほど、親子の関わりが多く、その子どもは積極性等の自立的行動習慣が身についている。

■ 「自尊感情」、「人間関係能力」、「文化的作法・教養」等の体験を通して得られる資質・能力が高い保護者ほど、その子どもが「お父さんやお母さんにほめられること」等お父さんやお母さんとの関わりについて「よくある」と回答する比率が高い（図382～384）。

■ 「自尊感情」、「人間関係能力」、「文化的作法・教養」等の体験を通して得られる資質・能力が高い保護者ほど、その子どもが「自分の思ったことをはっきり言う」、「困ったときでも前向きに取り組む」等の自立的行動習慣について「とても当てはまる」と回答する比率が高い（図379～381）。

《居住地と自然体験の関係》

結果⑥ 保護者が子どもの頃に自然体験を行った頻度は、居住地の種類によって違いが見られるが、現在の青少年の自然体験については、居住地の種類による違いは殆ど見られない。

■ 保護者の中学生期までの「野鳥を見たり、鳴く声を聞いたこと」の体験高群の比率は、居住地「政令指定都市・特別区」では24.9%を占めるが、「村」ではそれよりも40ポイント以上高い66.4%を占める（図243）。

■ 保護者の中学生期までの「夜空いっぱい輝く星をゆっくり見たこと」にあっても、居住行政区別にみた「村」と「政令指定都市・特別区」の間で30ポイント以上の比率差がある（図237）。

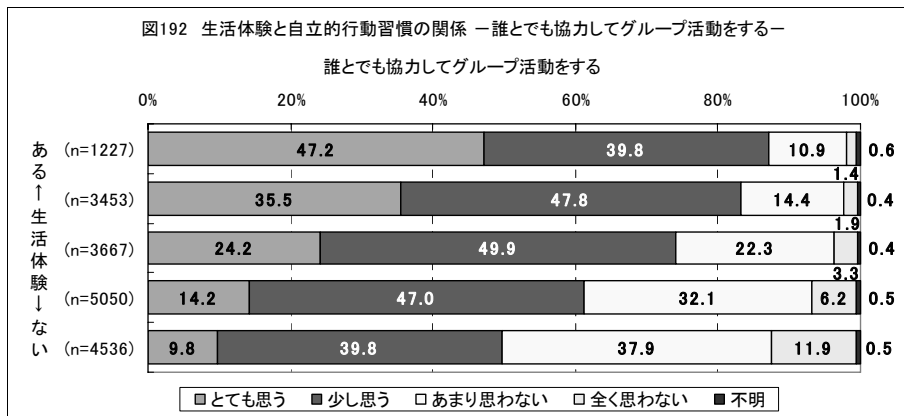
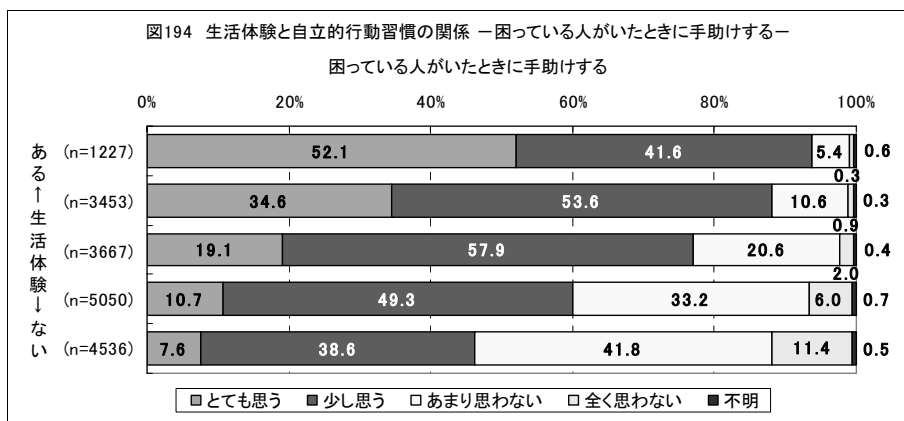
■ 青少年の自然体験については、都市規模による体験の頻度の違いは殆ど見られない（図301、299）。

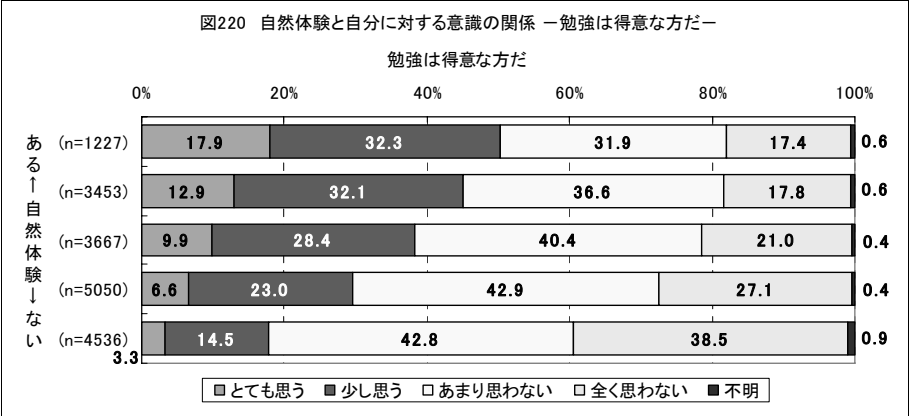
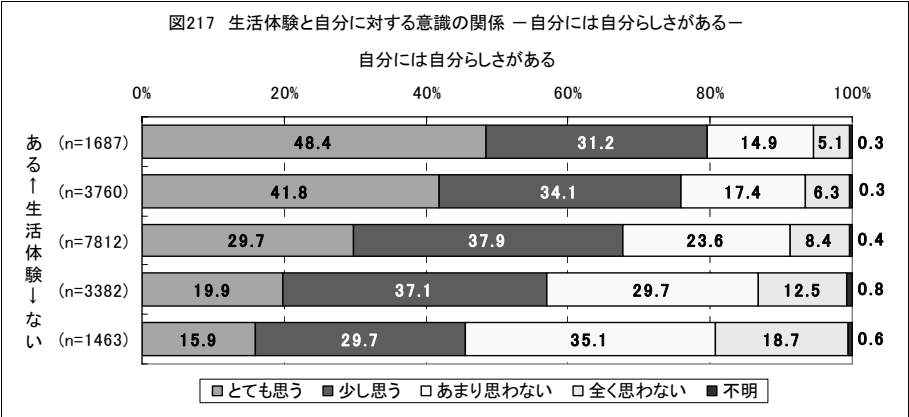
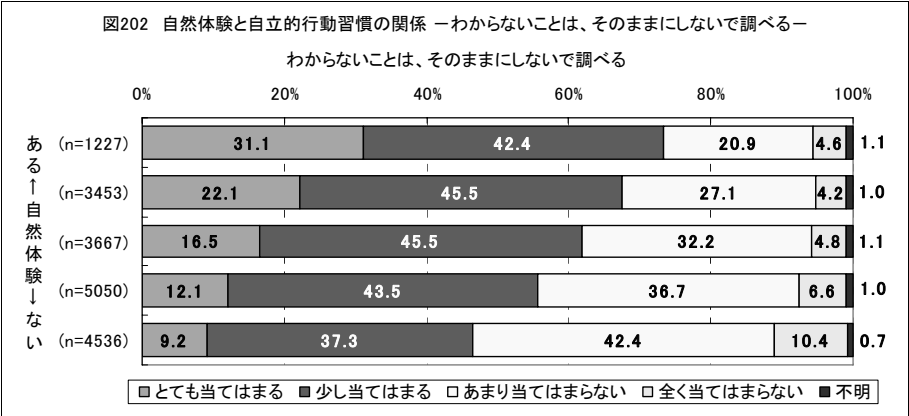
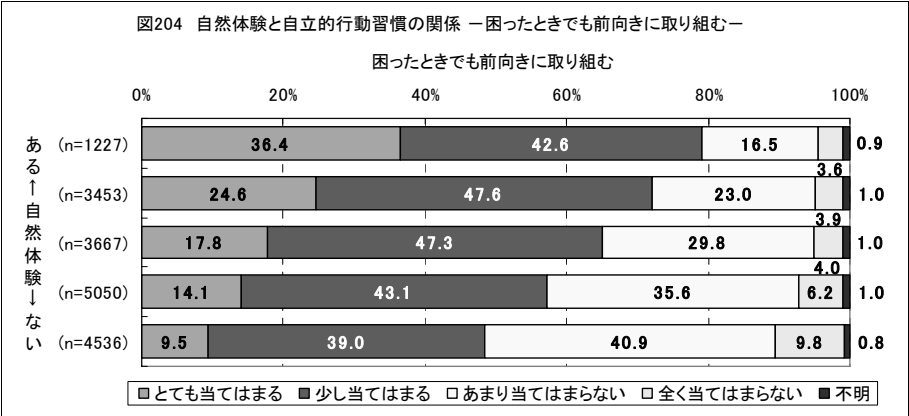
○調査結果の概要

《青少年の体験活動や自立に関する意識の実態》

結果① 体験を多く行っている青少年ほど、他者への思いやりや積極性などの自立的行動習慣が身についており、自己肯定感も高い傾向にある。

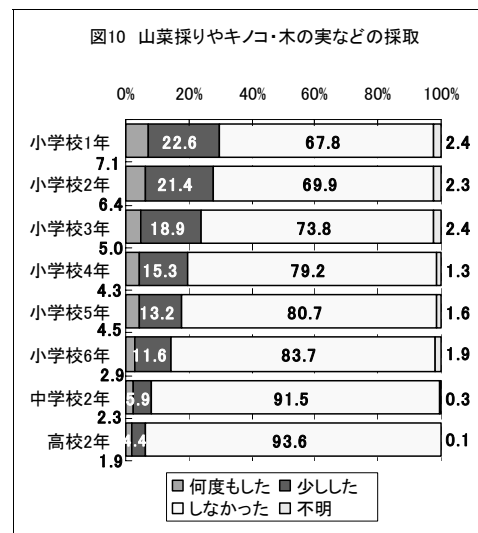
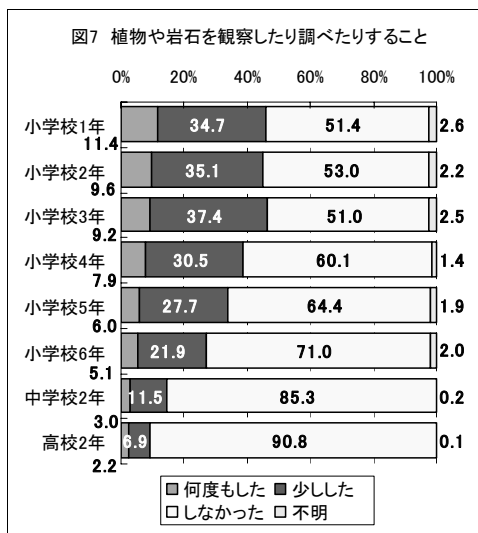
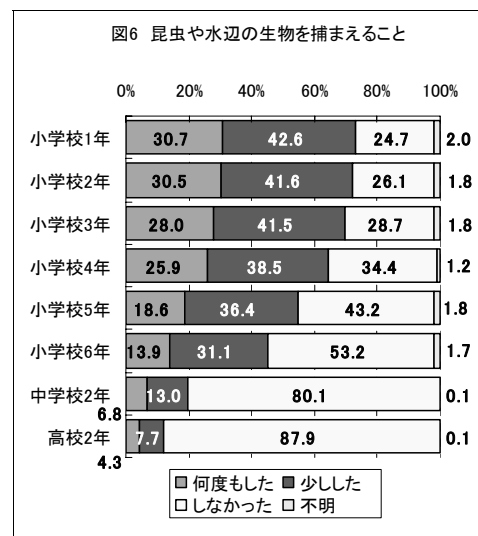
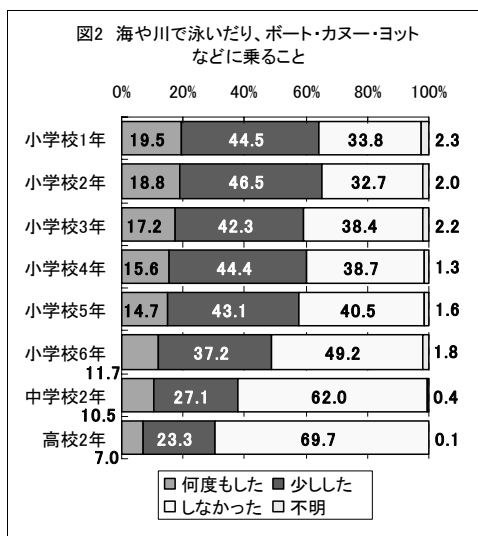
- 生活体験を最も多く行っている群における「困っている人がいたときに手助けする」(図 194) の「とても当てはまる」の比率 (52.1%) は、最も行っていない群における比率 (7.6%) の 7 倍近くであり、「誰とでも協力してグループ活動をする」(図 192) においても生活体験を最も多く行っている群と最も行っていない群の間で、5 倍近くの比率差がある。
- 自然体験を最も多く行っている群における「困ったときでも前向きに取り組む」(図 204)、「わからないことは、そのままにしないで調べる」(図 202) 等の比率は、最も行っていない群の「とても当てはまる」の比率の 3 倍を超えている。
- 「自分には自分らしさがある」(図 217) ついては、生活体験を最も行っているカテゴリーの「とても当てはまる」の比率が、最も行っていないカテゴリーの「とても当てはまる」の比率の 3 倍を超えている。
- 自然体験を最も行っている群における「勉強は得意な方だ」(図 220) の「とても思う」の比率 (17.9%) は、最も行っていない群における比率 (3.3%) の 5 倍以上である。



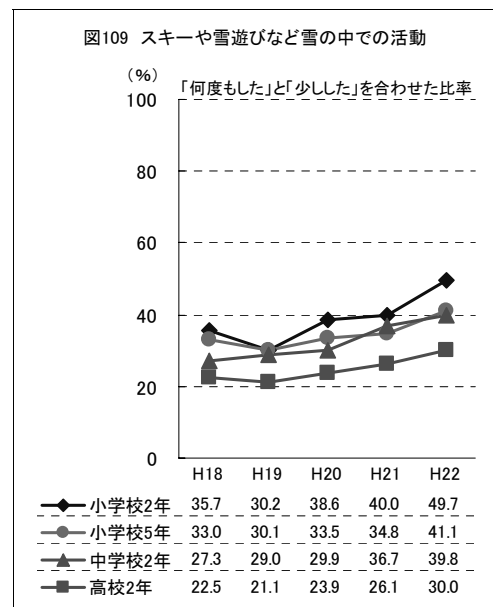
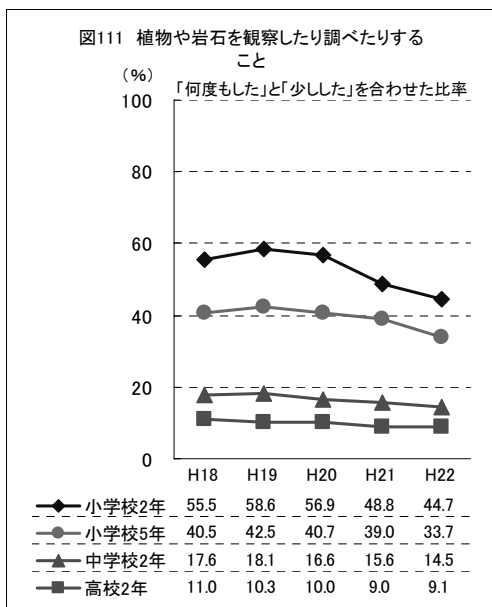
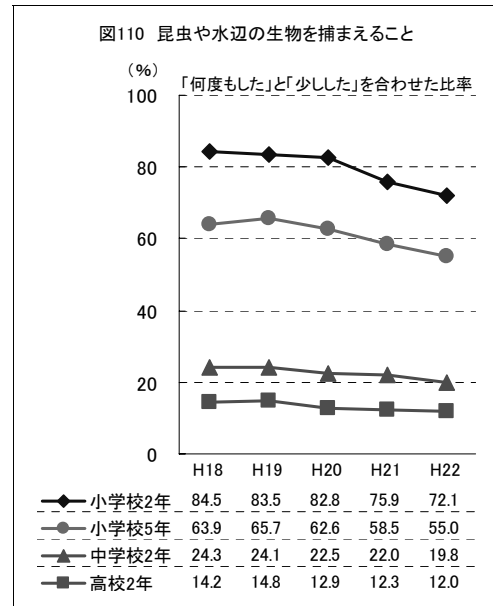
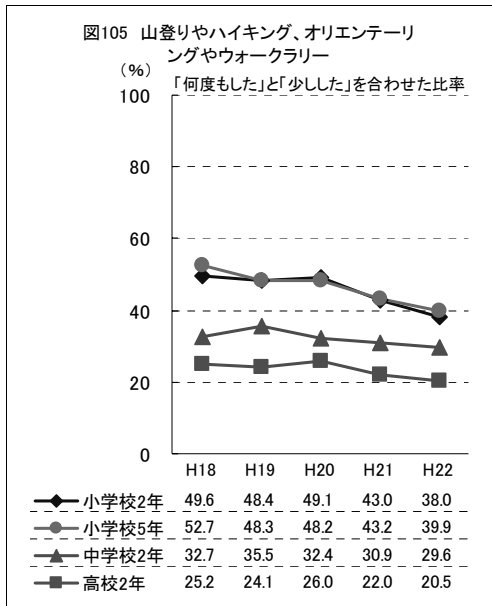


結果② 青少年の自然体験活動の実施率は、学年が上がるにつれて減少しており、またほとんどの活動に関して、ここ5年間で減少傾向にある。

- ・ 「海や川などで泳いだり、ボート・カヌー・ヨットなどに乗ること」(図 2)、「昆虫や水辺の生物を捕まえること」(図 6)、「植物や岩石を観察したり調べたりすること」(図 7)、「山菜採りやキノコ・木の実などの採取」(図 10) などについては、平成 22 年度に学校の授業や行事以外で「何度もした」の比率が学年が上がるにつれて低くなっている。
- ・ 特に「昆虫や水辺の生物を捕まえること」(図 6) については、「何度もした」の比率は小学校 1 年が 30.7% であるのに対し、高校 2 年は 4.3% と 20 ポイント以上低くなっている。



- ・ 小学校2年および小学校5年の「山登りやハイキング、オリエンテーリングやウォークラリー」(図105)、小学校2年の「昆虫や水辺の生物を捕まえること」(図110)、小学校2年の「植物や岩石を観察したり調べたりすること」(図111)は、平成18年度よりも平成22年度の比率のほうが10ポイント以上低くなっている。
- ・ 但し「スキーや雪遊びなど雪の中での活動」(図109)は、4学年とも平成18年度よりも平成22年度の比率のほうが高くなっている。

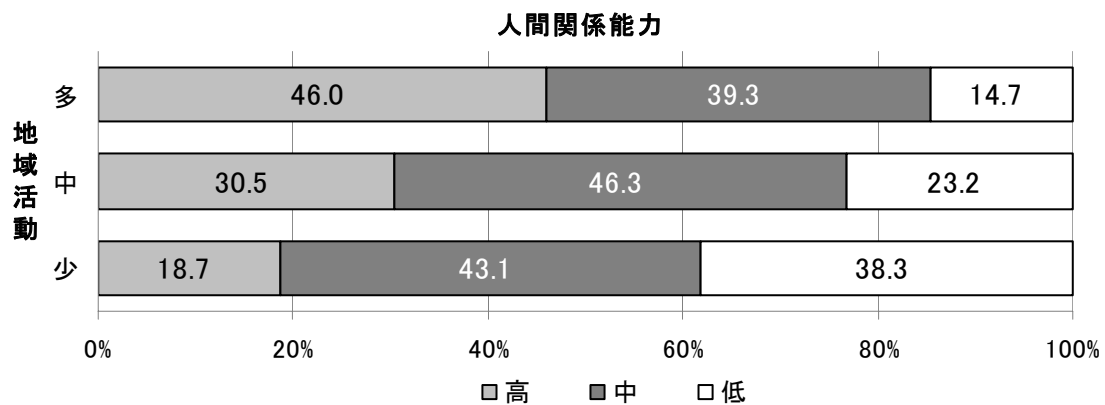


《保護者の子どもの頃の体験活動と現在の資質・能力の関係》

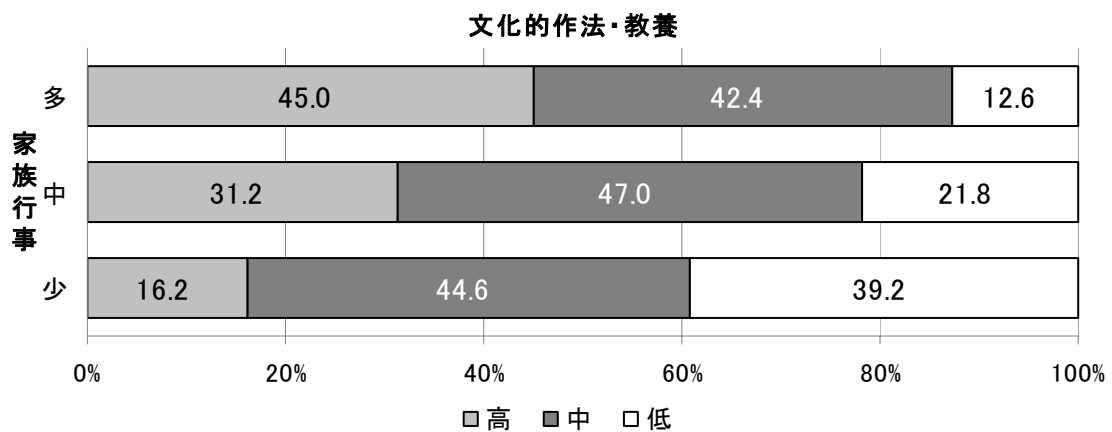
結果③ 地域活動やボランティア活動などの子どもの頃の体験が多い保護者ほど、人間関係能力、文化的作法・教養等の資質・能力が高い。

- ・ 「人間関係能力」、「文化的作法・教養」といった体験を通して得られる資質・能力の高い群に着目すると、「地域活動」、「家族行事」といった子どもの頃の体験が多ければ多いほど高得点群の比率が高くなるという傾向が顕著である（図 375、376）。

**図375 子どもの頃の地域活動と現在の人間関係能力との関係
（保護者調査結果）**



**図376 子どもの頃の家族行事と現在の文化的作法・教養との関係
（保護者調査結果）**



- ・ 子どもの頃の「ボランティア活動をしたこと」が多い保護者ほど、「人間関係能力」といった体験を通して得られる資質・能力が高いという傾向がある（図 377）。また、「自然体験」、「動植物とのかかわり」、「友だちとの遊び」、「地域活動」、「家族行事」、「家事手伝い」といった子どもの頃の体験が多い保護者ほど、「ボランティア活動をしたと思う」という現在の意識が高い傾向にある（図 378）。

図377 子どもの頃の「ボランティア活動をしたこと」と現在の人間関係能力との関係（保護者調査結果）

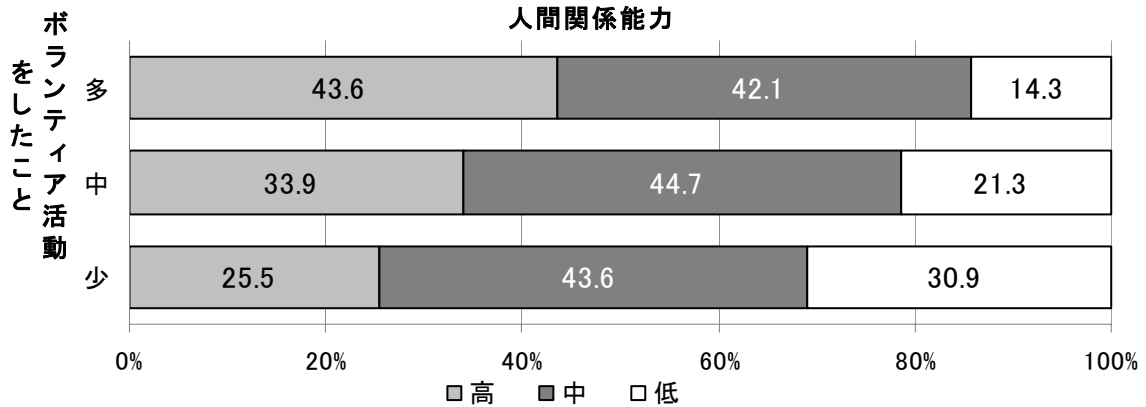
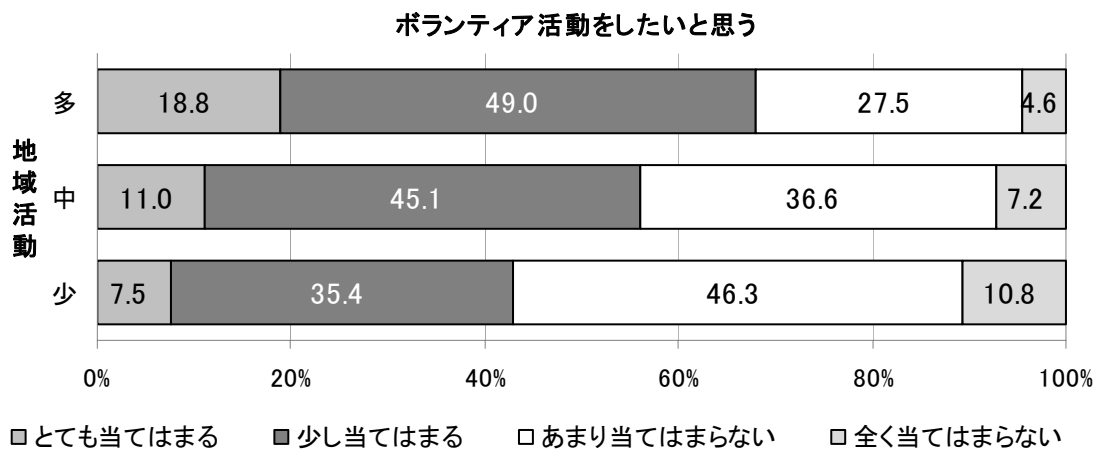


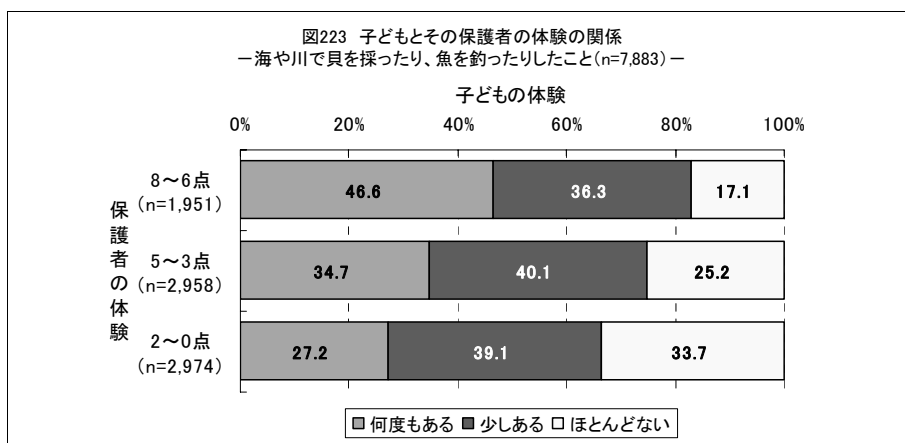
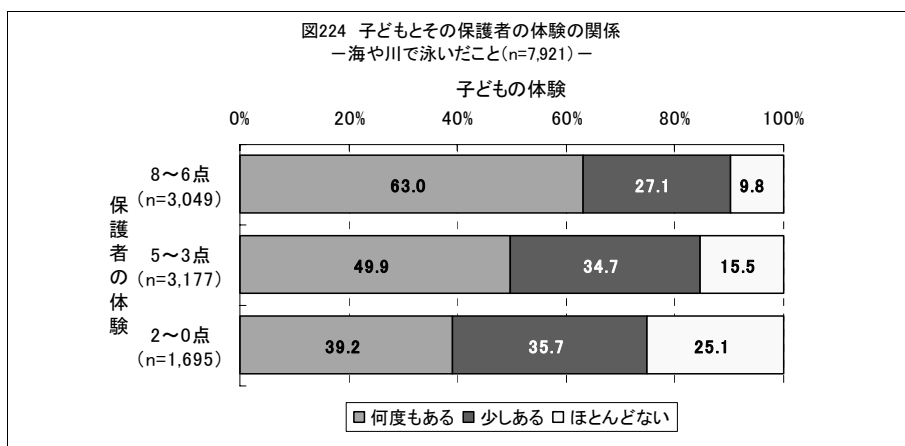
図378 子どもの頃の地域活動と現在「ボランティア活動をしたと思う」という意識との関係（保護者調査結果）

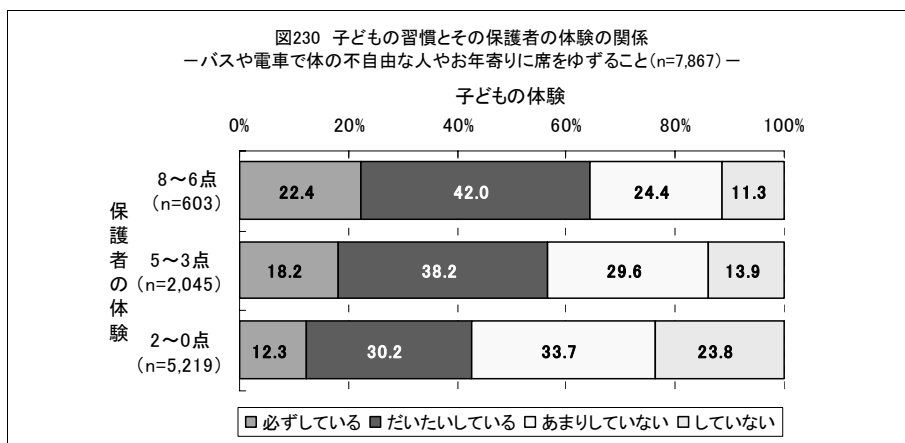


《保護者の体験活動とその子どもの体験活動の関係》

結果④ 子どもの頃に多くの体験を行ってきた保護者ほど、その子どもも体験を多く行う傾向にあり、また自己肯定感の高い保護者ほど、その子どもも自己肯定感が高い傾向にある。

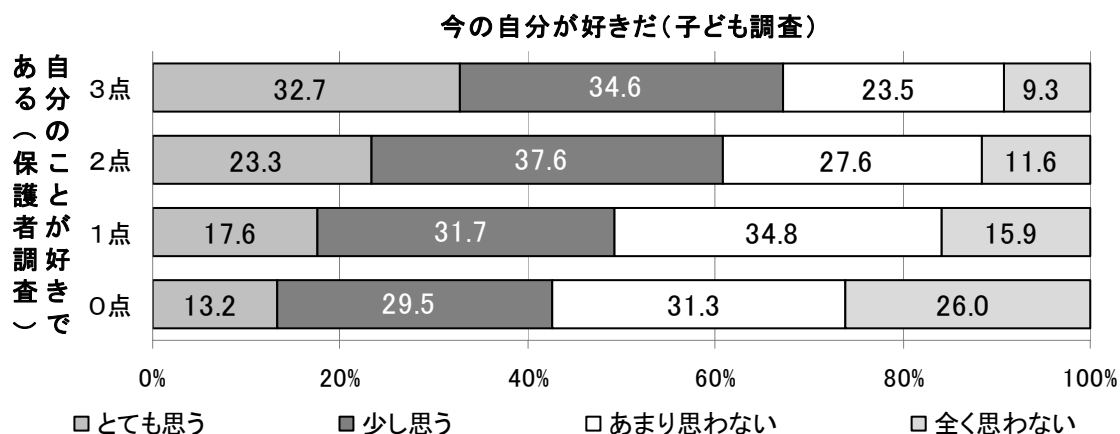
- 保護者の中学生期までの「海や川で泳いだこと」(図 224) の体験高群における子どもの同体験「何度もある」の比率 (63.0%) は、低群における比率 (39.2%) より 20 ポイント以上高く、「海や川で貝を採ったり、魚を釣ったりしたこと」(図 223) にあっても 20 ポイント近い比率差となっている。
- 「バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずること」(図 230) について、保護者の体験低群における子どもの体験「していない」の比率 (23.8%) は、高群における子どもの体験「していない」の比率 (11.3%) の 2 倍以上となっている。





- 類似した項目を用いて、保護者とその子どもの意識の関係を見ると、子ども調査結果の「今の自分が好きだ」に対し、「とても思う」と回答したグループに着目すると、保護者の「自分のことが好きである」の項目得点が高いグループになればなるほど、その子どもたちが「とても思う」と回答している比率が高くなるという傾向が顕著である(図387)。

図387 保護者の「自分のことが好きである」とその子どもの「今の自分が好きだ」という意識との関係



結果⑤ 保護者の自尊感情・人間関係能力等の資質・能力が高いほど、親子の関わりが多く、その子どもは積極性等の自立的行動習慣が身についている。

- ・ 「お父さんやお母さんにほめられること」等の子どもの生活の中でのお父さんやお母さんとの関わりへの意識について「よくある」と回答したグループに着目すると、保護者の「自尊感情」、「人間関係能力」、「文化的作法・教養」等の体験を通して得られる資質・能力が高い群になればなるほど、その子どもが「よくある」と回答している比率が高くなるという傾向が顕著である（図 382、383、384）。

図382 保護者の「自尊感情」とその子どもの「お父さんやお母さんにほめられること」という意識との関係

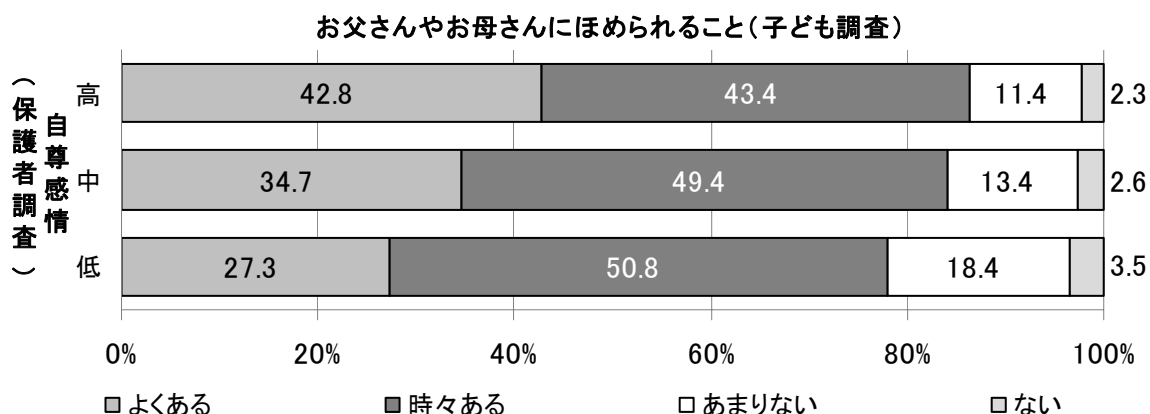


図383 保護者の「人間関係能力」とその子どもの「お父さんやお母さんにほめられること」という意識との関係

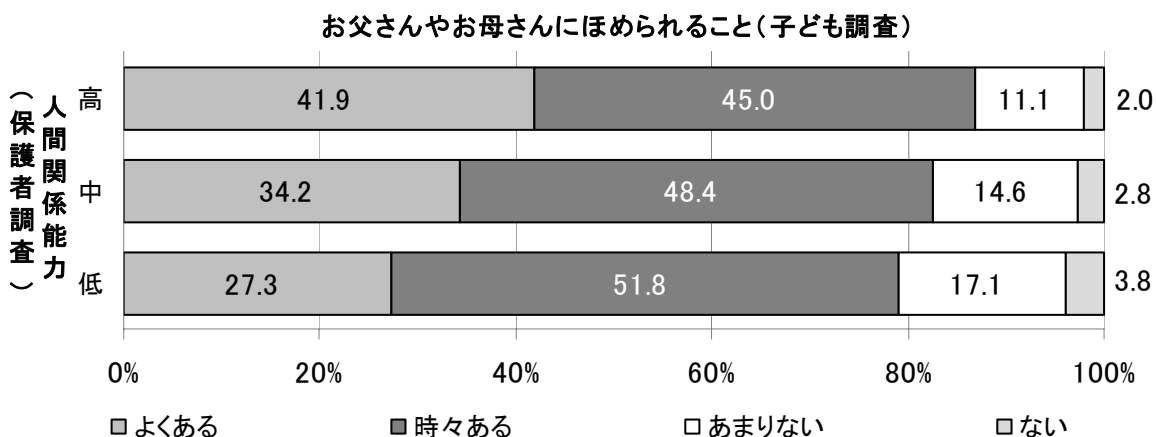
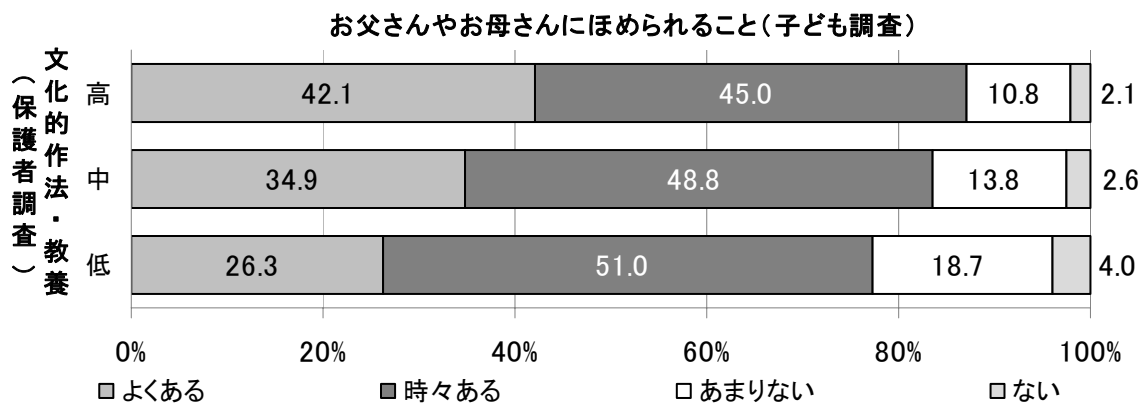


図384 保護者の「文化的作法・教養」とその子どもの「お父さんやお母さんにほめられること」という意識との関係



- 「困ったときでも前向きに取り組む」等の子どもの自立的行動習慣について「とても当てはまる」と回答したグループに着目すると、保護者の「自尊感情」、「文化的作法・教養」、「人間関係能力」等の体験を通して得られる資質・能力が高い群になればなるほど、その子どもが「とても当てはまる」と回答している比率が高くなるという傾向が顕著である (図 379～381)。

図379 保護者の「自尊感情」とその子どもの自立的行動習慣「困ったときでも前向きに取り組む」という意識との関係

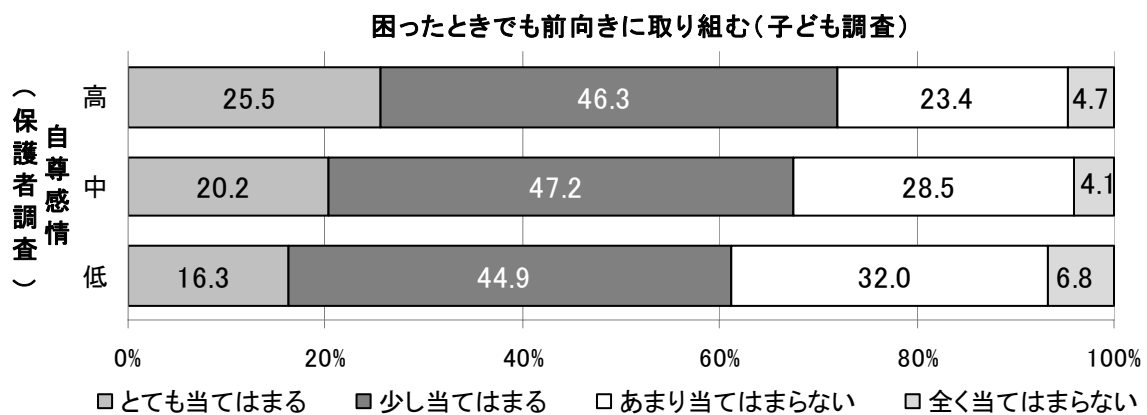


図380 保護者の「人間関係能力」とその子どもの自立的行動習慣
「自分の思ったことをはっきり言う」という意識との関係
自分の思ったことをはっきり言う(子ども調査)

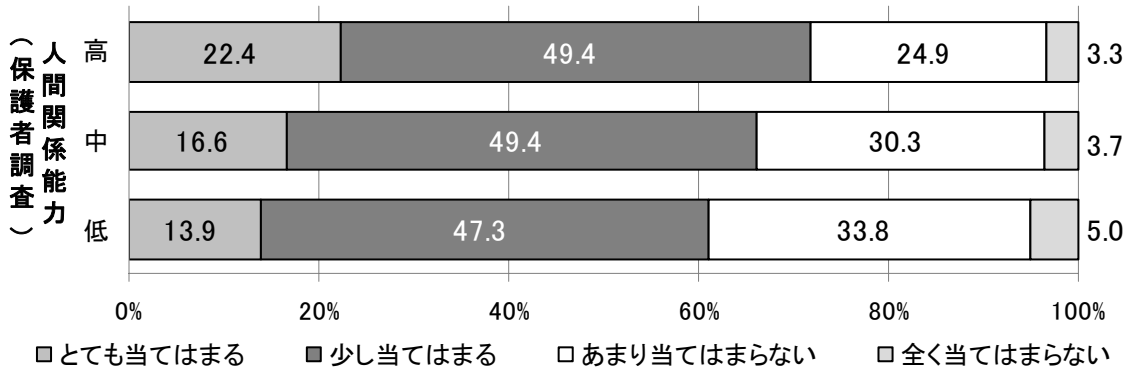
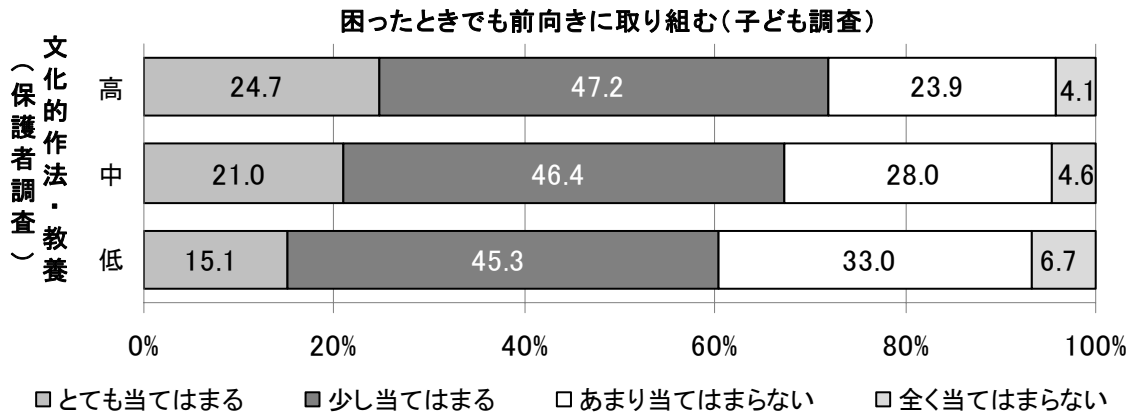


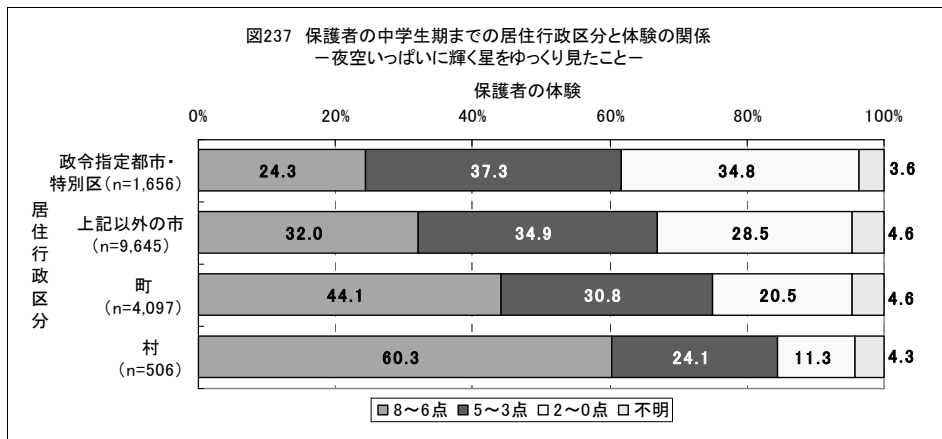
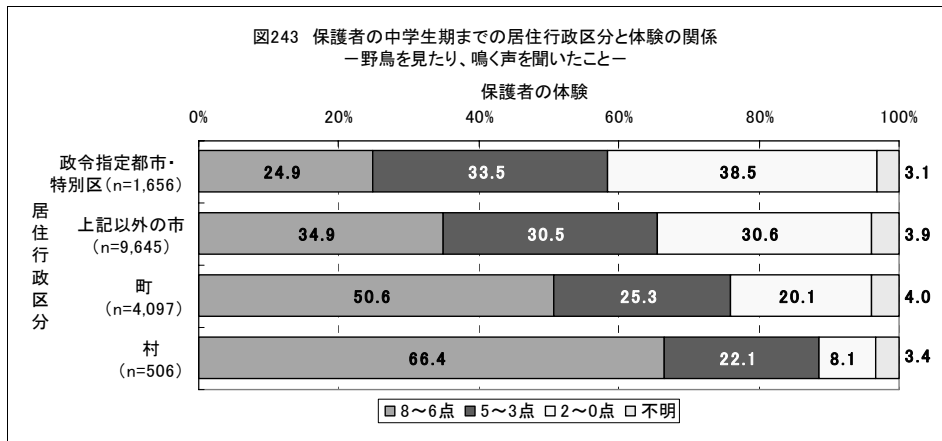
図381 保護者の「文化的作法・教養」とその子どもの自立的行動習慣
「困ったときでも前向きに取り組む」という意識との関係



《居住地と自然体験の関係》

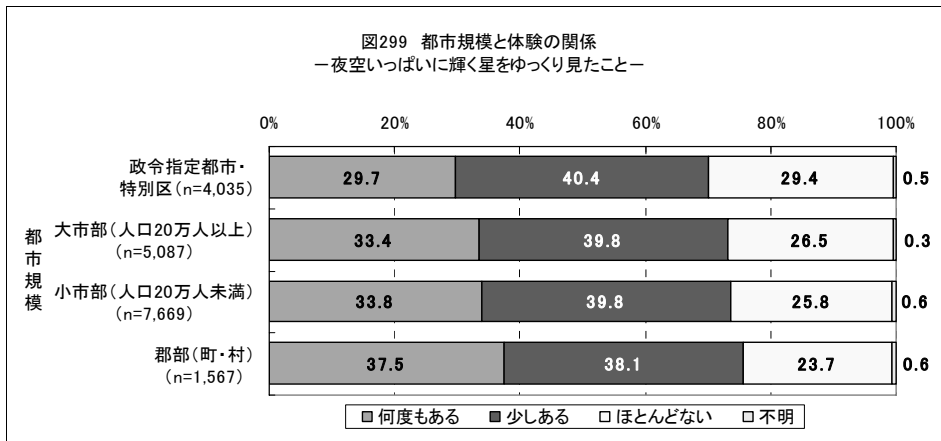
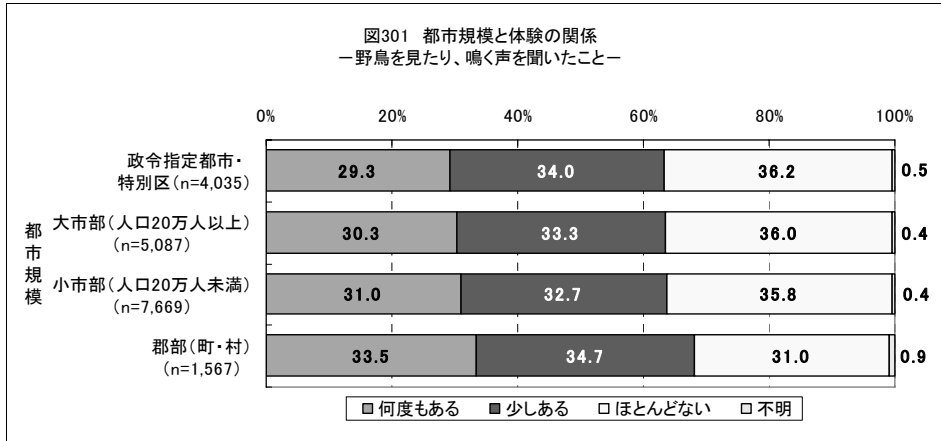
結果⑥ 保護者が子どもの頃に自然体験を行った頻度は、居住地の種類によって違いが見られるが、現在の青少年の自然体験については、居住地の種類による違いは殆ど見られない。

- ・ 居住行政区別にみると、保護者の中学生期までの「野鳥を見たり、鳴く声を聞いたこと」(図 243) の体験高群の比率は、「政令指定都市・特別区」では 24.9%を占めるが、「村」ではそれよりも 40 ポイント以上高い 66.4%を占める。
- ・ 保護者の中学生期までの「夜空いっぱい輝く星をゆっくり見たこと」(図 237) においても、居住行政区別にみた「村」と「政令指定都市・特別区」の間で 30 ポイント以上の比率差がある。



<参考：青少年>

- 青少年の自然体験については、都市規模による体験の頻度の違いは殆ど見られない(図301、図299)。



参考：調査の概要

1. 調査の目的

青少年教育関係者が実施する事業の企画立案、運営等に資するため、青少年の体験活動等や自立に関する意識等の実態について全国規模の調査を実施し、基礎資料を提供する。

2. 調査内容

<子ども調査>

- ・ 自然体験活動の実態
- ・ 生活習慣の実態
- ・ 自立に関する意識・行動 他

<保護者調査>

- ・ 自分の子どもの自然体験活動の実態
- ・ 中学生期までの自然体験の実態※
- ・ 体験を通して得られる資質・能力※ 他

※当機構で平成22年度に実施した「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」の調査項目を使用

(1)本調査における「体験」

教育的な意図に基づき組織化される「体験活動」と、結果として教育的な効果は期待されるものの、教育的な意図に基づいて組織化されたものではない日常的な「生活習慣」を区別し、それぞれに関する質問を設けた。

(2)本調査における「自立」

自立的要素を含み、将来の社会的自立の基礎となると考えられる「自立的行動習慣」と「現在の自分に対する意識」の2つの側面からそれぞれの質問項目を作成した。

3. 調査対象

- ・ 全国の公立小学校1年生・2年生・3年生の保護者
- ・ 全国の公立小学校4年生・5年生・6年生とその保護者
- ・ 全国の公立中学校2年生
- ・ 全国の公立全日制高等学校2年生

4. 調査実施期日

都道府県及指定都市教育委員会宛協力依頼状発送	：平成22年12月24日（金）
市区町村教育委員会宛協力依頼状発送	：平成23年1月14日（金）
調査票発送	：平成23年1月24日（月）
回収締め切り	：平成23年2月18日（金）

5. 回収数

配付数				回収数						
学校種別	学年	学校数	在籍児童・生徒数	学校数		調査票				組数 ^d
						子ども用		保護者用		
				回収数	回収率 ^a	回収数	回収率 ^b	回収数	回収率 ^c	
小学校	1年	100	2,685	98	98.0%	***	***	2,463	91.7%	***
	2年	100	2,852	98	98.0%	***	***	2,649	92.9%	***
	3年	100	2,995	97	97.0%	***	***	2,734	91.3%	***
	4年	100	3,068	97	97.0%	2,810	91.6%	2,808	91.5%	2,807
	5年	100	3,121	95	95.0%	2,856	91.5%	2,850	91.3%	2,848
	6年	100	2,985	97	97.0%	2,776	93.0%	2,774	92.9%	2,768
中学校	2年	150	5,115	146	97.3%	4,679	91.5%	***	***	***
高等学校	2年	150	5,609	144	96.0%	5,237	93.4%	***	***	***
計		900	28,430	872	96.9%	18,358	92.3%	16,278	91.9%	8,423

a 配布した学校数に対する回収した学校数の比率 (%)

b 在籍児童・生徒数に対する回収した子ども用調査票数の比率 (%)

c 在籍児童・生徒数に対する回収した保護者用調査票数の比率 (%)

d 子ども用調査票と保護者用調査票のペアが確認できた数

6. 調査報告書執筆者

白木 賢信 独立行政法人国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター客員研究員
東京家政大学人文学部准教授

土屋 隆裕 大学共同利用機関法人情報・システム研究機構
統計数理研究所データ科学研究系調査解析グループ准教授

中村 織江 独立行政法人国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター研究員

※ 詳しい調査結果については、機構 HP にて調査報告書を公開していますので、そちらをごらんください。

「調査研究報告書検索」 http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/

参考：主な質問項目

学校の授業や行事以外の自然体験活動

- ・ 山登りやハイキング、オリエンテーリングやウォークラリー
- ・ 昆虫や水辺の生物を捕まえること
- ・ 山菜採りやキノコ・木の実などの採取
- ・ 植林・間伐・下草刈りなどをすること 等

生活体験・自然体験

- ・ ナイフや包丁で、果物の皮をむいたり、野菜を切ったこと
- ・ タオルやぞうきんを絞ったこと
- ・ チョウやトンボ、バッタなどの昆虫をつかまえたこと
- ・ 海や川で貝を採ったり、魚を釣ったりしたこと 等

お手伝い

- ・ 買い物のお手伝いをする事
- ・ 新聞や郵便物をとってくる事
- ・ 靴などをそろえたり、磨いたりすること
- ・ 食器をそろえたり、片付けたりすること 等

生活習慣及び道徳観・正義感

- ・ 朝、顔を洗ったり、歯をみがいたりすること
- ・ 朝、食事をとること
- ・ バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずること
- ・ 友達が悪いことをしていたら、やめさせること 等

その他の生活習慣

- ・ 夜ふかしして、遅くまで起きていること
- ・ 寝坊して、学校に遅刻したりすること
- ・ 夕食を一人で食べる事
- ・ お父さんやお母さんにほめられること 等

自立的行動習慣

- ・ ルールを守って行動する
- ・ 先のことを考えて行動する
- ・ 自分の思ったことをはっきり言う
- ・ 友だちが悪いことをしていたら、やめさせる
- ・ 相手の立場になって考える 等

自分に対する意識

- ・ 学校の友だちが多い方だ
- ・ 勉強は得意な方だ
- ・ 今の自分が好きだ 等

生活環境・メディア接触・生活実態

- ・ 1日にテレビやゲームなどをする時間
- ・ 兄弟や姉妹の有無
- ・ アルバイト経験 等

公的機関や民間団体等が行う自然体験活動に関する行事への参加

公的機関や民間団体等が行う活動以外の自然体験活動への参加

保護者の各年齢期（中学生期まで）における体験

自然体験、動植物とのかかわり、友だちとの遊び、地域活動、家族行事、家事手伝い

- ・ 海や川で貝を採ったり、魚を釣ったりしたこと
- ・ 米や野菜などを栽培したこと
- ・ かくれんぼや缶けりをしたこと
- ・ 近所の小さい子どもと遊んであげたこと
- ・ 家族の誕生日を祝ったこと
- ・ ナイフや包丁で、果物の皮をむいたり、野菜を切ったこと
- ・ ボランティアをしたこと 等

保護者の体験を通して得られる資質・能力 ※

- ・ （自尊感情）自分のことが好き、家族を大切にできる 等
- ・ （共生感）休みの日は自然の中で過ごすことが好き、悲しい体験をした人の話を聞くとつらい 等
- ・ （意欲・関心）もっと深く学んでみたい、なんでも最後までやり遂げたい 等
- ・ （規範意識）叱るべき時はちゃんと叱れる親が良い、社会のルールは守るべき 等
- ・ （人間関係能力）人前でも緊張せずに自己紹介ができる、近所の人に挨拶ができる 等
- ・ （職業意識）大人になったら仕事をするべき、社会や人のためになる仕事をしたい 等
- ・ （文化的作法・教養）お盆やお彼岸にはお墓参りに行くべき、はしを上手に使うことができる 等

※ 詳細は、「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」（独立行政法人国立青少年教育振興機構）をご覧ください。